

特別寄稿「長期的な創作活動における芸術家と研究者との協働可能性」を巡って

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京藝術大学社会連携センター 公開日: 2025-07-10 キーワード: 作成者: 藤崎, 圭一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://geidai.repo.nii.ac.jp/records/2000478

特別寄稿「長期的な創作活動における芸術家と研究者との協働可能性」を巡って

この論文にはふたつの結論がある。通常、筆頭筆者は責任筆者であるのだが、ここでは二人の著者の立場は対等である。筆者の一人、坂田ゆかりは国際共同演劇プロジェクト《テラジア》の企画・演出・運営を行うプロジェクトの中心人物であり、もう一人の田中里奈はドイツ語圏や東アジアにおけるミュージカル受容を研究する研究者である。

田中は《テラジア》では制作に関与せず、作品紹介・解説・批評などを行うことで芸術実践者である坂田に伴走するかたちでプロジェクトを支えてきた。外部の人間として作品を研究したり批評したりするのでなく、また脚本づくりのためにリサーチを行い作品制作に関与するわけでもない、つまりこの外部観察者でもない制作者でもない立場の協働者が、プロジェクト全体に、またアーティスト個人にどのような影響を及ぼすのか。アートプロジェクトの協働関係としては前例のあまりないであろう、この協働関係を顕在化し、その意義と可能性を検証するのがこの論文のテーマである。

この関係性の意義と可能性は、芸術実践者（坂田）と研究者（田中）では異なるものとなる。前者がプロジェクトに研究者を招き入れることで、自作を芸術研究の対象として論ずる契機にしようとするのに対して、後者は研究者が芸術実践を引き受ける立場にいて生まれる新たな批評性に意義を見出しており、同じ協働関係を対象にした研究であっても、その成果は異なるものとして顕れてきている。それゆえふたつの結論で本論は締めくくられている。

しかし二人の協働の意義づけは全く異なるものでなく、クレア・ビショップの『人工地獄』を参照し、田中の立場を「支持する(support)」という言葉で表して、この非対称的な協働関係の意義を説いたことに本論の大きな成果がある。

前例のないプロセスを辿っているプロジェクトであるために、実践の経過と役割分担を詳述しなければならなかった分、論文としてはいささか冗長な内容になっている。長いと思われた方は、とにかく5章の結論を読んでもらいたい。

いま、現代アートでは「アーティストコレクティブ」という名の下に様々な新しい形の協働のかたちが世界各国で生まれている。この論文で語られている「支持する(support)」者の立場は、自己批評性と自己発信力を内在したコレクティブのあり方を考える上で重要な論点となるものである。

《テラジア》は2024年完了予定の進行中のプロジェクトであり、この協働関係を論ずるにあたってはまだ流動的な部分もあり、総括の論考にはならないために、本論文は「研究ノート」と位置づけられてもよいものであろう。しかし単なる事例報告ではなく、上述のようにアーティストコレクティブの実践研究として重要な意義を含むために、本紀要では研究ノートではなく、特別寄稿という形で本論文を掲載することとなった。